

# 2300ミリ幅加工に成功

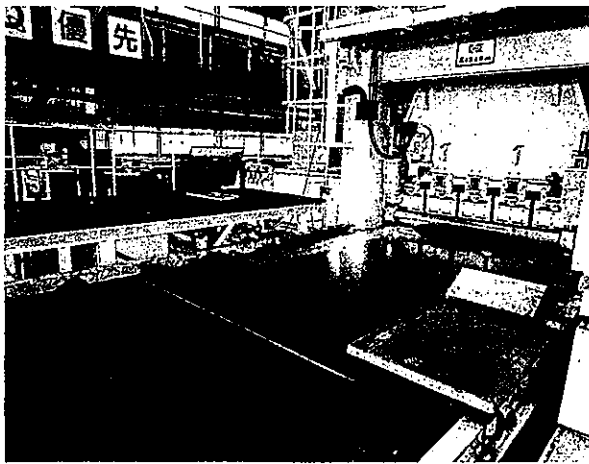
## レベラー 建材分野で拡販

大手コイルセンターの村山鋼材（本社千葉県浦安市、村山和雄社長はこのほく、国内最大となる板幅2300ミリのホットコイル（板厚16ミリ、SS400規格品）のレベラーカットに初めて成功した。従来は1850ミリが最大だった。ホットコイルのレベラーカットシートは同じ板厚の厚板製品に比べ、塗装後の光沢の面で表面美観に優れ、ショットプラストなどの後工程を省略できることから、まずは建材分野を対象に厚板代替材としてのメリットをアピールし、拡販を進めていきたい考えだ。

### 村山鋼材

今回実施した2300ミリのホットカットシートは浦安鉄鋼団地内の厚板溶断加工会社に販売され、溶断用母材として問題なく使用されている。レベラー加工時には鋼板ユーザにも立ち会ってもらい、加工後のフラット性や光沢の良さなどの品質を確認した。

同社では、一昨年に旧東京工場から浦安工場にジャンボカッティンクや特装車両、建設機械、産業機械向けがメインとなったおり、コイル材の特長である板厚や材質の均一性を生かし、曲げ精度の高さをアピール



厚板代替材としての利点をアピール

やプレス加工の生産性向上に寄与している。表面スケールが10ト20ミクロンと薄く、加工後に光沢が出る点も厚板にはない特長で、短いリードタイムで必要な時に必要な量だけ生産できる点や、切断長さを自在に変更できる点も強みとなる。

今後は広幅コイルの加工実績を積み重ね、東京五輪に向け、旺盛な建設需要の取り込みを図るとともに、主力のトラック、特装、建設機械向けにも販売していくことを目標に掲げ、さらなる品質向上に注力する。

### レベラーロール交換

#### 品質・生産性を維持向上

村山鋼材はこのほど、浦安工場（千葉県浦安市港）の大型レベラーライン2基のロール交換を実施した。同社の主力製品で、レベラー加工時の熱による歪みが発生しにくい「レベラー切断用鋼板」の品質・生産性の維持向上のため、平坦度矯正能力を保持する狙い。総投資額は約4000万円。

村山社長は「他社との差別化を図り、生き残りを懸けて特長を出していくためにはコストがかかってもやるべきことは実行していく必要がある」と話し、「協業パートナーである藤澤鋼板との設備相互利用の推進にも、一層役立てるとともに、お客様に喜んでいただける商品づくりに努めていきたい」としている。

今期は1カ月余りを残し、厚板部門と倉庫部門が期初計画を上回るペースで推移している。薄板部門は未達となっているが、会社全体での目標クリアに向け、全社一丸となってラストスパートをかける構えだ。

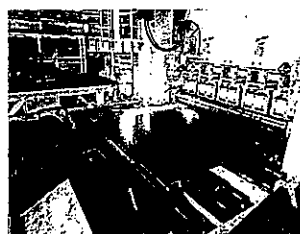
2014年8月19日(火曜日)

# レーザー切断用鋼板対応板幅拡大へ

## 村山鋼材

### 国内最大2300mm残留能力解放成功

村山鋼材(本社千葉県浦安市、村山和雄社長)



は、レーザー切断用鋼板の対応板幅拡大に取り組んでいる。既に板厚16mm、板幅2300mmのホットコイルの切断を終えカットシートの残留応力解放のレベルングテストに成功しており、近いうちに建機向けなどを主体とする加工業者向けの商品化を実現する構えだ。なお建設用鋼材として用いられる場合には精度的には全く問題はない。板幅2300mmは厳しく品質性が求められる建機・トラック・特装車両向けカットシートとしては国内最大となる。同社では浦安工場のジャンボカッティングライン1号機(写真)で、このレーザー切断用鋼板の製造を行っている。建機向けの加工を行う厚板シャヤー業者向けのレーザー切断用鋼板は約10年前の発売以来好評を博しており、ロングセラー商品に成長している。独自の技術力で火入れ後も反りが生じないフラットなレベラーカットが実現出来ているところに村山ブランドたる由

縁がある。今回のテスト成功が商品化に結びつくことで、より顧客対応の柔軟性が増し、話題性が高まることは必然だ。

同社のレーザー切断用鋼板の最大の特徴はコイル材の特徴を活かし板厚や材質が均一で安定していることにある。曲げ精度が非常に高く、プレス加工の生産性向上にもつながっており、顧客からの信頼は厚い。また表面が非常に美麗で(表面スケールはわずか10-20μm)、塗装後の光沢に優れているためショットブラスト工程を省略でき、顧客側の加工コストダウンに貢献している。同社では板幅対応を広げるために同ラインのロール交換を今年のGW期間に実施している。同ラインには3基レベラーが付いているが、このうちの間にあるレベラーを交換した。また同時に同じ工場にあるジャンボカッティングライン2号機の間接レベラーも交換している。一連のメンテナンス投資にかかった費用は約4千万円にのぼる。

同社は藤澤鋼板との協業により2社でトータル設備合理化を行うという業界初の取り組みを成功させている。中厚物カットシートに特化し、今回のように自らに高いハードルを課すことでブランド力向上にまい進している。

# 村山鋼材

## 高品位自社商品の「レーザ切断用鋼板」

# 厚物広幅タイプを追加

熱延コイルセンター大手の村山鋼材(本社・千葉県浦安市入船、社長・村山和雄氏)は、コイルの内部残留応力を開放し、加工時の反りや歪みを抑えた同社オリジナルの高品位カッターシート製品「レーザ切断用鋼板」の広幅対応力を向上。板厚16<sup>mm</sup>(SS400規格)で幅2.3<sup>m</sup>までの品質確立にめどをつけた。

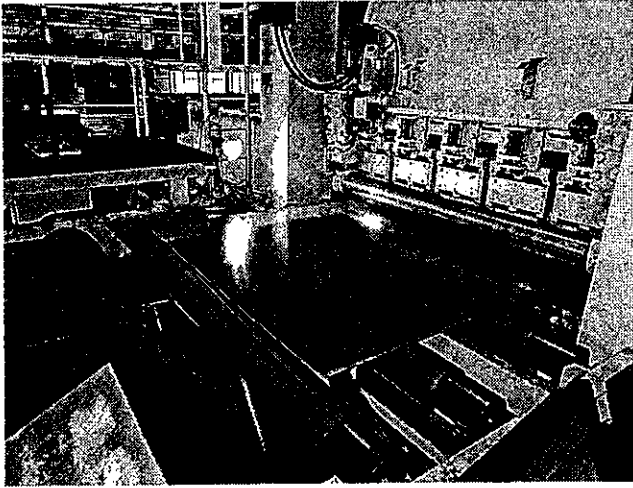
## 板厚16ミリで幅2.3メートルもめど

表面性状や平坦度を「り」で、テスト材を美たところ、切板商品として「問題なし」との評価を得たという。「レーザ切断用鋼板」は、独自の塑性調整技術(特許)をベースに、コイル特性に合わせて条件設定した独自データで剪断することでコイル内部に残留する応力の開放(除去・均一化)を実用化した。

「レーザ切断時に曲がりや反りが発生しないので、切断後の矯正・手直しが不要。プレスなどの次工程加工の際も、歪み・ねじれを抑えるといった特長を持

つ。2年前に、厚物広幅長尺レベラー「ジャンボ・カッティングライナー1号(JCL1)」のファイナルレベラーを一新した際、SS16<sup>mm</sup>厚で幅1850<sup>mm</sup>まで技術確立・商品化。今回、リリーフレベラー(塑性調整機)のロールを交換し、広幅対応力を高めた。

同社では、今後も6幅サイズを超える広幅コイルの加工機会を捉え、品質精度の安定化(量産対応)に向けて技術を研鑽。主要向け先であるトラックや特装車輛、建機・産機向けを含む幅広い需要分野をターゲットとするほか、東京五輪・パラリンピック開催を背景に今後の活性化が期待される建材分野向け拡販にも力を注ぐ。



幅2.3メートルの高品位カッターシートに